

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	2671200331		
法人名	社会福祉法人宇治明星園		
事業所名	グループホーム なごみの里伊勢田		
所在地	京都府宇治市伊勢田町毛語45番地		
自己評価作成日	平成27年7月5日	評価結果市町村受理日	平成27年9月7日

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

なごみカフェを継続して行っており、地域とのつながりを深めている。お客様の中には、地域のBリハに行きたいけど定員オーバーで行けない方や、軽度の認知症高齢者や要介護者や要支援者の老老介護をしている方、若年性認知症のご夫婦など、地域の中の居場所づくりになっている。お客様同士で顔なじみの関係ができ、つながりが広がっている。地域の学区福祉委員にも入会し、地域の行事等に住民の方々と一緒に活動することで、地域の課題などもよく見えてくる。また小学生を対象に認知症サポーター養成講座を開催し、グループホームが地域の社会資源として認知症ケアを発信していくこと、地域にとって必要な存在、安心できる存在となるよう地域支援活動に力を入れている。6人という少人数のグループホームであるので、きめ細やかなケアや一人一人の思いに寄り添い、その思いに沿ったケアを全職員が心掛けて行っている。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaijokensaku.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2671200331-00&amp;PrefCd=26&amp;VersionCd=022">http://www.kaijokensaku.jp/26/index.php?action=kouhyou_detail_2014_022_kani=true&amp;JigyosyoCd=2671200331-00&amp;PrefCd=26&amp;VersionCd=022</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	一般社団法人 京都ボランティア協会
所在地	〒600-8127京都市下京区西木屋町通上ノ口上ル梅湊町83番地1「ひと・まち交流館京都」1階
訪問調査日	平成27年7月21日

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

事業所である古民家には、昔ながらの床の間付き畳部屋があり、その縁側の向こうには、年輪をかさねた松の木が鎮座する中庭がある。敷地内の畑では、多種多様な野菜や花々がボランティアの協力により育てられ、日々の食卓を飾っている。職員は利用者の残存機能を維持する為に、何が出来るのかを全員で考え、日々の散歩や若い頃からの趣味や作業を個々の日常に取り入れて、生活の場を提供している。2日毎の入浴・全員布パンツで過ごしている現状からも、質の高い介護が窺える。また、自治会での役員活動・小学生への認知症サポート講座・なごみカフェ開催・各種行事に利用者と共に参加等、地域への貢献・交流に力を注ぎ、「地域住人に受け入れられている」との実感を得ている。法人理念「地域に開かれた地域に根差した地域住民に支えられた施設づくり」が実践されている。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている		事業所の理念は「一人一人の気持ちに寄り添い、心のおりになれますように…みんなが築こう(気づこう)なごみの里」である。管理者は、職員採用時に理念についてしっかり話をし、会議でも理念に沿ったケアができているか話し合っている。職員は、「気を緩めるととんでもない事が起こる」と肝に銘じ、細やかな対応・行き届いた介護を目指している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会と学区福祉委員に入会し、地域の各種行事等にも準備段階から参加し、地域の方々と活動と一緒にしている。なごみカフェにも地域の方が来られている。保育園や小学校との交流も行っている。	昨年管理者は、町内会の組長・副会長を引き受け、集会所の管理も行った。学区福祉委員でもある。地域の文化祭、地蔵盆、夏祭り等に参加し、町内の方との繋がりや受け入れられている実感を得ている。夏祭りでは牛丼店を出し、利用者も浴衣を着て販売し、盆踊りに参加した。毎年近隣の小学校(4年生)に出向き、認知症サポーター養成講座の講師を務め、利用者との交流もしている。近隣保育園からは、各種行事(餅つき・発表会・秋祭り)に招待され利用者が参加している。住民からは、「なごみカフェが楽しみ」との声がある。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に活用している	平成26年度は組長となり、町内役員として、副会長と集会所管理者を引き受け、町内事業を住民の方々と一緒に取り組んだ。小学生を対象に認知症サポーター養成講座を開催した。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	会議メンバーも定着し、事業報告から意見や助言をいただいたり情報交換をしたり有意義な場になっている。	会議には家族、学区福祉委員、傾聴ボランティア、なごみの里サービス向上提言委員(隣人であり第三者苦情窓口担当)、包括支援センター職員が参加し、利用者の状況・行事報告・ヒヤリハット報告等を行い、各委員からも活発な意見がでている。なごみカフェの参加者を増やす為、福祉委員の提案でチラシを作り配布を行った。家族の会議への欠席が続いている。会議の内容は家族会で報告している。	家族会で、会議に参加することの意義の説明や案内状送付等を行い、家族の参加が継続されることを期待する。また、議事録は全家族に配布されることを望む。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	宇治市介護保険課の担当者とは必要に応じて相談したりと連携を図っている。事業内容やサービスへの取り組みにも理解をいただいている。介護相談員や宇治市との三者連絡会に参加し情報交換を行っている。	行政の担当課には、運営推進会議議事録の手渡し・介護保険更新手続き・介護報酬保険請求加算について等、随時報告・相談に行き連携を図っている。行政主催の三者連絡会(宇治市・介護相談員・事業所)や集団指導でも情報交換を行い協力関係を築いている。市の介護相談員の訪問が月に1度ある。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の禁止は契約書に明記している。毎年1回は勉強会を行い、周知徹底させている。玄関はご入居者が容易に開けられるものであり(ご家族からは同意書をいただいている)縁側や裏口は網戸にしたりと入居者が出入りできるようなっている。	身体拘束の禁止は重要事項説明書に明記し、利用者(家族)に説明している。研修は外部も出席するが、毎年内部研修を行い周知徹底を図っている。法人として「身体拘束のチェックリスト」があり、介護で疑わしく感じた時は照らし合わせて検討している。門扉が重く単独で外部には出にくい、敷地内は玄関や縁側から自由に出入り出来る。			
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	毎年1回は勉強会を行い、周知徹底させている。また不適切なケアについても職員のストレスに起因しないよう気をつけている。				
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度は理解しているが、実際に活用する場面はなく積極的ににはできていない。				
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	不明点がないよう努めている。また認識や理解不足がある時は随時説明し、納得していただいている。				
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	介護相談員の派遣事業の受け入れ、家族の会を年4回実施しており、そこで意見交換を行っている。運営やサービスに関することへの意見はあまり出ていないが、日々の関わりでご入居者やご家族の思いをお聞きし、ケアにつなげている。	家族会を年4回開催し、利用者の状況等報告、意見交換の場としている。家族からの要望はあまりないが、「できるだけ長くここで暮らしたい」という意見はよく出ている。利用者や家族とは、少人数なのでコミュニケーションがとりやすい環境にある。			
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	職員会議前に全職員にアンケートを記入してもらい会議に出られない職員個々の意見をこぼさないようにしている。出された意見は業務改善やケアの方法、事業計画にも反映させている。	職員会議前に議題を募るアンケートを実施し、職員に配っている。事前に自分の意見を持ち会議に臨み、事業やケアに関して活発に話し合っている。職員からはレクリエーション時の提案が多い。作成した質問カード(好きな花・彼・)は、ゲームの中で昔話に広がっている。管理者との個人面談は年2回行い、必要に応じてアドバイスをしている。法人で年1回「実践研究発表」の場があり、平成25年の施設発表は最優秀賞を受賞した。			
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	労働時間や休暇についてもできる限り職員個々の希望に添えられるよう努めている。福利厚生においては健康診断以外にも毎年1回インフルエンザの予防接種を助成している。				

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	年度初めに職員個々の個人目標を設定し中間での経過、年度末には総括をしてもらい、目標達成に向けて協働できるようにしている。職員に合わせて研修にも参加してもらっている。また法人内での実践発表の場もあり、職員の意欲やモチベーションに向上につながっている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	管理者にはあるが、一般職員には交流などはない。			
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用前に事前面接を行い、現状把握に努めている。できるだけ入居前の生活に近い環境や精神面でも安心していただけるよう努めている。要望に応じて体験利用も実施可能であることを説明している。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	利用前に事前面接を行い、現状把握に努めている。要望に応じて体験利用も実施可能であることを説明している。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	他のサービス利用を行ったケースはない。利用していたデイサービス等に遊びに行かせてもらうことはある。なじみの環境や人、ご本人が安心できることを考慮しながら初期の支援にあたっている。ご家族とも十分情報交換しながら、ケアの統一を図っている。			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ご入居者との信頼関係を築くことが第一歩である。そのための関わりを重視するようには徹底している。またご入居者のできることをきちんと見極めまずは自立支援に努めている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人と家族の関係、ご家族の思いもそれぞれであり、共に支え合うという視点や理念であることも説明し、一定の理解はしていただいておりますが、ご家族によっては協力は得られないこともある。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族以外にも近所の方、親戚、ご友人等が面会に来られている。自宅へ戻ったりもしている。	馴染みの美容院や喫茶店で憩い、通いなれた店舗での買い物を楽しんでいる。通っていたデイサービスに遊びに行き、本人は覚えていなくとも職員に声をかけられ喜ばれている。地域の行事に参加すると、知人から声をかけられ、新たな情報を得ることもあり、日々の支援に繋げている。習字・裁縫・歌・踊り・畑仕事等、慣れ親しんだことを継続している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々関わった全職員が記録を行っている。その中でどこまで記録を読み込んでいるかに個人差はあるが、ケア方法や新たな発見などを皆で共有している。ケアプランの実施状況も記載している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	緊急時の対応やご家族が動けない時も受診の送迎や付き添いを行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員には2ヶ月1回訪問していただき、話し相手やレクリエーション等の活動を支援していただいている。また地域の学区福祉委員が主催する各種行事に参加させていただいている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	全家族がなごみの里往診医へ変更されている。往診時は日頃の様子をお手紙で知らせているし、必要に応じて受診にも同行している。	かかりつけ医は全利用者が協力医院に変更し、内科は月に1回・整形外科は月に2回・歯科医院は必要時に往診を受けている。各受診前には利用者の様子を記録して往診医に渡している。受診は職員が同席し双方向で情報を交換している。他に訪問マッサージを利用している方もいる。精神専門分野は協力医療機関の認知症外来や京大認知症外来を受診している。心身の状態は毎月の手紙の中で家族に報告している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	全くできていない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は随時面会へ行き状態把握に努め、ご家族や病院関係者との情報交換を密にし、場合によってはカンファレンスにも参加し、退院後の混乱をできるだけ避け、これまでの生活が送れることや元の状態にスムーズに戻れるよう支援している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期に向けた方針は現段階では明確化できていない。ご家族と話し合いの場は持ったがどこまでできるのかというところでは不透明である。	法人方針としては、看取りは行う方針である。職員は外部研修に参加したり、看取り経験者(法人内)の話聞き「最後まで看取りたい」との意思を示している。家族会でも話題に上がり話し合いを行っている。医療面での協力・調整が不十分であり、実施には至っていない。	事業所で出来ること・出来ないことを見極め、家族の理解・協力を得ると共に、協力医療機関との調整を進め、事業所としての方向性を示すことを望む。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時のマニュアルを作成し、周知徹底させているが、定期的な訓練は行っていない。医療的な側面は弱いため、職員にも不安がある。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回消防訓練を実施している。1回は消防署立会いの下、総合訓練を実施している。地域には呼びかけはしているが参加には至っていない。協力体制も具体的にはない。食料貯蓄について3日分は備えている。地域の防災訓練には町内の方々と一緒に参加した。	防災訓練は年2回夜間を想定し行っていたが、今年度から昼間の想定も行っている。近隣住民の参加は得ていないが、近隣にある特別養護老人ホーム(法人内)との協力体制は出来ている。水害時は2階や特別養護老人ホームへ避難することになっている。近隣小学校で行われた市防災訓練に利用者と共に参加し、組長から各世帯への連絡や地域の方と一緒に実際の避難を経験した。事業所に至る前の道は狭く、消防車が入れない現状がある。	初期段階で一番頼りになるのは、近隣住民の力ではないでしょうか。訓練時に参加依頼を行うと共に、地域の自衛消防団にも広報活動を行い協力を得ることを期待する。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報についてはご家族から同意書をお願いしている。幼児化しないこと、不適切な言葉かけには特に注意するよう努めている。	毎年研修を行いマニュアルも整備している。排泄誘導の声掛けは大きな声で言わない・子どもに話すような言葉がけはしない・言葉をごまかさない・皆の前で「家族が来てよかったな」の声掛けはしない等々、統一を図り、本音で話し合う姿勢を示している。アンケートで家族より「いつ訪問しても本人がきちんとした身なりでいる」との感謝の言葉があり、確認することができた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ご入居者それぞれの意思を表出されるので、とにかく意思確認は必然である。自らはできなくなっている方にはこちらが意識して選択できる場面やご本人の思いを汲み取る、感じ取ることを心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	これまでの習慣(整髪、お化粧、食後のおやつ、娘のご遺影にお花を供えて毎日水を換えること等)やご本人の思いを大切に、それを日常生活の中で普通にしてもらっている。それぞれが思い思いに過ごせるよう環境整備している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	今まで通っていた美容室へ行ったり、行けない時は職員で整髪してあげたり、また衣類へのこだわりを尊重している。ボランティアによる訪問カットやエステがある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	畑で育てた旬の野菜、年中行事(お彼岸や節分、土用の丑の日等)を大事にし季節を感じられるように献立と一緒に考えたり、リクエストを聞いたりして実施している。準備から後片付けまでご入居者と一緒に行っている。	食材は週に1回生協から届くが、足りない物を利用者と共に行き、地元の商店の方と交流している。敷地内の畑には、茄子・きゅうり・豆類・しし唐・トマト・芋等々、多くの野菜をボランティアと共に栽培している。献立は畑の収穫物を考慮し利用者と話し合い決めている。米とぎ・皮むき・炒めるなど、後片付けを含め個々ができることに利用者は参加している。行事食で季節感を味わい、車で出かける外食も楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食量は確認している。栄養のバランスに注意しながら献立を考えているが、栄養バランスとしてのカロリー計算等は行っていない。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	必要に応じて対応しているが、自らされる方もあり、1名は必ず毎食後に口腔ケアを行っている。ご入居者の強い口臭が2ヶ月間で完治している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中の尿取りパット使用者は1名、排泄パターンを把握し、声かけや誘導でトイレでの排泄を行っている。自立者は2名、残り4名は何らかのケアが必要。夜間でも個別に対応しトイレでの排泄を心掛けている。	入所時は全員布パンツを使用し、排泄状況を見極めることから始めている。トイレ誘導の間隔を把握(排泄チェック表)し、介助を行うことで現在パット使用者は1名のみで他は布パンツである。トイレ誘導を基本とし、夜間も行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	できるだけ下剤に頼らないように繊維質の食事や乳酸飲料の提供、運動、腹部マッサージやホットパック等を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しむように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	希望に合わせてはいるが、タイミングに合わせることはできている。入浴は衣類準備から浴後のケアまでマンツーマンで行っている。入浴剤を使用したり、浴後のマッサージ、保湿などリラックスしていただけるよう努めている。入浴しない日は足浴を実施している。	毎日風呂の準備を行い、2日に1回の入浴をしている。入浴を拒否する方はいない。状態の悪い時は清拭と下着の交換を行っている。足浴も取り入れ継続して、水虫治療や足の浮腫の軽減に効果を上げている。季節湯はみかんの皮を干してみかん湯・ゆず湯・よもぎ湯を楽しんでいる。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間の安眠を確保するため(生活リズムの確立)日中の活動を基本とし、午睡の時間もその方の状態や希望に応じて行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	不明な点は先生に指導を仰いだり、服薬表を作成しており、新しい薬が処方された場合はその効用や副作用等を確認し、記載している。服薬前には必ず職員同士で間違いがないかチェックしているし、服薬後の確認も行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	これまでしてこられたこと(お習字、裁縫、生け花、畑仕事、歌、踊り等)を日常生活の中に取り入れている。散歩には雨天以外、毎日出掛けているし、道中地域の方々と出会うと必ず挨拶をしたり、ごみ拾いをしたりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	毎年1回ではあるが、個別外出を実施している。帰宅願望が強い方には自宅へ戻ったり、買い物や喫茶店が好きな方には出掛けたり、お墓参りに行ったり、友人に会いに行ったり、生まれた地などそれぞれの希望や思いに合わせて外出している。	利用者の体調に合わせて、毎日10分～40分の散歩をしている。徒歩やシルバーカー・車椅子で、近所の寺や公園・小学校におしゃべりしながら行っている。行事外出(さくら見物・紅葉狩り等)は全員が参加している。気候の良い春先には、個別外出を企画し、家族と共に墓参りに行ったり、母校の小学校を訪ね恩師や校歌を思い出された利用者もいる。開設13周年記念には、利用者(全員)・家族・職員で奈良大和郡山に向き、藍染を体験した。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	2名は自己管理をされており買い物時はご自分で支払をされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	ご家族から荷物や贈り物が届いた際はお礼の電話をしてもらったり、ハガキを送ったりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	1年中常に換気をよくし、季節を感じてもらえるよう、季節の花を活けたり季節ごとの貼り絵やカレンダーはご入居者に作ってもらっている。工夫しているが、6人それぞれの配慮はしているつもりでも本人にとってどうかの検証は難しい。	ダイニングキッチンでは利用者の前に職員が座り、向き合う配置になっている。食事の準備や食事を摂りながら、会話や笑い声が弾む。テレビはここで皆で見る。近所の方に貰ったメダカに餌をやり洗濯物をたたみ、各種レクリエーションと起きているほとんどをここで過ごす。隣にある8畳(京間)には床の間に金魚の掛け軸がかかっている。広い縁側(南向き)からは中庭が望め、冬場は日向ぼっこが楽しめる。なごみカフェ時は襖を外すと30畳近い広さになる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ご入居者同士のトラブルや混乱等が生じるのでリビングでの座席にはかなりの神経を使って配置している。和室のソファや縁側、玄関等に椅子を置き、それぞれの居場所作りを工夫している。孤立しないように気配りはしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	据え置き家具はなく、すべて自前で用意していただいている。その他布団や写真、小物等自宅で使っていたなじみの物を持ち込んでいただき、できるだけ自宅と近い環境を心掛けている。また転倒予防のためベッドやタンスなどの配置にも考慮している。	窓は大きく風通しが良い。日差しのきつい窓には簾が掛かっている。天井灯以外は全部持参である。立ち上がりの困難な方には、ベッド柵の取り付けをアドバイスしている。冬には炬燵・電気毛布を使用する方もいる。季節毎の衣服の入れ替えは家族が行っている。そのためか、室内はものが少なくすっきり感がある。写真や小物の飾り物がある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	すべての出入り口は階段がついており、和室の縁などの段差により下肢の機能訓練ができる作りにはなっている。		